

こもの文化財だより



第 34 号

2021 年 2 月 15 日 発行

編集・発行 菰野町教育委員会

菰野横山邸園の魅力を磁力に ～ 世界の KOMONO ～

東海学園大学経営学部客員教授/プロデューサー

横山 陽二

はじめに

2020 年秋、菰野町教育委員会から「こもの文化財だより」への原稿執筆依頼をいただいた。春に、菰野横山邸園にある建築物と庭がそれぞれ国の「登録有形文化財」、「登録記念物（名勝地関係）」に登録されたからだろう。この依頼を受諾したのは、これまで菰野横山邸園について書かれている新聞、雑誌、ネットなどの記事や情報が事実でないものも含まれていたことから、正しい情報を伝えたいと考えていた矢先の依頼だったからである。2020 年 2 月に、菰野の蔵で発見した 150 件余りの古文書を翻刻して編集をした『菰野横山家蔵 古文書の翻刻～永禄（重廣）から明治（久平）まで』を完成していたので、その内容も織り交ぜながら正しい情報を伝えたいと考えたからである。そして、菰野横山邸園への来訪者に予習・復習のための教材として活用いただくことを考えたからである。そのため、この原稿はネットで公開されることになった。さらに、菰野で次世代を担う若者に向けて横山邸園について書き残しておくべきとの使命感から引き受けた次第である。



写真 1 菰野横山邸園

依頼書には、「国登録有形文化財横山家住宅」及び「国登録記念物横山氏庭園」に関する歴史、文化などのテーマについて寄稿するように書かれているが、本稿では、以下の構成で筆を進めながら、歴史と文化について触れていくこととする。ただし、歴史と文化を専門とする学者でもなく、また建築や庭園の専門家ではないことをご承知おきいただきたい。

本稿の構成

1. 菰野横山邸園にある「国登録有形文化財」と「国登録記念物（名勝地関係）」について
 2. 横山家の歴史から見える菰野横山邸園の変遷
 3. 文化財の維持管理と活用
- まとめ

1. 菰野横山邸園にある「国登録有形文化財」と 「国登録記念物（名勝地関係）」について

本題に入る前に、菰野横山邸園と名付けた理由と文化財に登録した契機について触れておきたい。まず、菰野横山邸園と名付けた理由について説明する。2016 年春頃に、翌年から菰野の主屋、元診療所と土蔵を貸し出すことになったので、そのための準備を始めていた。借主のレストランとギャラリーの屋号と区別するために、全体の名称が必要となったのである。なお、菰野を横山邸園の前に付けたのは、全国の方に菰野という地名を覚えていただきたいからである。筆者が東京在住で会社員をしていた時、本籍は菰野町と言った時に、三重県出身者以外は、その名前を知らない人が多かったことによる。

次に、文化財に登録することになった経緯について記す。2016 年 12 月に菰野町前教育長の川瀬敏氏（故人）が、筆者の自宅がある名古屋まで来られた。川瀬氏は、菰野町の歴史・文化拠点構想に関する説明をして、その構想実現の第一歩として横山家が所有する邸宅、庭などを調査して文化財登録を薦めたい旨の意向を示した。当時は、登録文化財の名称を知っている程度であった。50 年を過ぎた建築物や庭が歴史や文化に価値があると判断された時に文化財に登録可能になる要件までは知らなかったもので、驚きを持って聞いた。大学教員になる前に企業や自治体などの展示・イベントなどの実務を経験していたので、文化財登録の付帯条件となる駐車場やトイレなどの社会インフラがないなどの懸念点を申し上げて川瀬氏との打ち合わせは終了した。当時の所有者である父に報告したところ、父からは、菰野町のお願いであるので前向きに検討すること、ただし近隣の住民に迷惑とならないような配慮をしてほしいという 2 点の意見が出された。後日、父の意見を教育長に伝えた後に、文化財登録のための調査へと進展していったのである。以後 3 年にわたり、教育長はじめ教育委員会の担当者には調査から書類作成までの一連の手続きを一生懸命担っていただいた。関係者の方々にこの場を借りて御礼申し上げたい。

ここからは本題である菰野横山邸園に存在する 6 件の「国登録有形文化財」（令和 2 年 4 月 3 日に登録）について文化庁が発行した登録証と付帯資料を参考に説明したい。

1) 横山家住宅主屋（登録番号 24-0276）建築面積 175 m²

主屋は、江戸時代末期に、安政伊賀地震で倒壊し、再建したと伝わる。登録基準は、国土の歴史的景観に寄与しているからである。屋根は入母屋造で起り付の棧瓦葺とし、屋根の南面西寄りには千鳥破風を設けている。四週に下屋を廻らせ、玄関には切妻の庇を付けている。東が土間、西が床上である。重厚な外観である。大正 8 年には、屋根を茅葺から棧瓦葺へ改修。昭和前期に厨房、40 年頃に浴室を増築。なお、令和 2 年 6 月には厨房と風呂の浴槽を改修。



写真 2 横山家住宅主屋

2) 横山家住宅書院及び渡廊下（登録番号 24-0277）建築面積 96 m²

昭和 43 年に古い家屋を取り壊して、重森三玲氏に作庭していただいた際に増築した。主屋の西に渡廊下で接続し、西の座敷一〇畳と次の間六畳からなる。座敷は琵琶棚、付書院を持ち、床脇は天袋付の違棚である。北、東、南に縁を廻らしている。西面には腰掛待合がある。南には重森氏の枯山水を望む。和風書院である。国土の歴史的景観に寄与していると判断されて登録された。



写真 3 横山家住宅書院及び渡廊下

3) 横山家住宅^{じんじつあん}尽日庵（登録番号 24-0278）建築面積 19 m²

建築年代は、明治中期頃と伝わる。昭和 27 年に名古屋市成田家、昭和 43 年に菰野横山家に移築された。名古屋表千家吉田紹敬宗匠の起こし図が残る。書院の南西に切妻造、棧瓦葺の草庵風茶室が建つ。北庇に躰口、東庇に濡縁を設けて貴人口を開き、書院西妻の腰掛待合から飛石で導く。内部は二畳台目で、西面の洞床の前に板床を入れる。南から西へ縁を廻らし、西に水屋を突出する。近代数寄屋の好例にして、造形の規範と



写真 4 横山家住宅尽日庵

なっているものと判断されて登録された。

4) 横山家住宅旧診療所（登録番号 24-0279）建築面積 59 m²

建築年代は、明治後期、昭和 20 年代に改修されている。主屋の東に建つ寄棟造の南北棟で、棧瓦葺とする。外壁は腰高を木製シングルの鱗張り、上部を堅板張とする。軒先は円弧断面に漆喰を塗込める。西面に瓦葺下屋の廊下がつく。第二次大戦中には、診療所として使用されていたことから、内部は南から旧待合室、旧診療室、旧レントゲン室が並ぶ。外観が特色あるため、目を引く。国土の歴史的景観に寄与していると判断されて登録された。



写真 5 横山家住宅旧診療所

5) 横山家住宅土蔵（登録番号 24-0280）建築面積 24 m²

江戸末期に建築され、大正 8 年頃・平成 28 年改修。主屋の北東、北側道路沿いに建つ。切妻造の置屋根を棧瓦葺として、南面に瓦葺庇がつく。外壁は一階が簾子下見張り、二階が漆喰塗で鉢巻を廻し、東西妻に堅羽目板を張る。南面戸口は銅板張りの方引戸である。小屋組は登梁とする。敷地北側の景観を引き締める。平成 28 年に内部を改修。国土の歴史的景観に寄与していると判断されて登録された。



写真 6 横山家住宅土蔵

6) 横山家住宅正門（登録番号 24-0281）間口 4.2m

江戸後期、昭和 40 年頃改修。主屋の南東に南面して建つ薬医門。切妻造の起り付屋根を棧瓦葺とする。門柱は五平使いで、板戸を引分けに建込み、東脇間に潜戸を設ける。冠木を両妻面まで延ばし、両妻で控柱上の桁に梁を掛渡し軒桁を据える。土間石敷の水切溝は重森の作庭時のもの。建築年代は家伝と部材の経年状況から。東側鬼瓦銘「勢州／三重郡／智積村／瓦屋伊兵衛」とある。造形の規範となっているものとの判断から登録された。



写真 7 横山家住宅正門

次に、令和2年3月10日付けで「国登録記念物（名勝地関係）」に登録された横山氏庭園（図1）について筆を進めていくこととする。筆者は、これまで京都にある東福寺本坊庭園、重森三玲庭園美術館を見学し、東京在住時に勤務先近くで開催された「生誕110年重森三玲の庭」（2006年）を視察して、それなりに重森三玲氏により作庭された庭や氏の考え方について勉強してきたつもりだ。それでも、その浅薄な知識を披露できる度胸は持ち合わせてない。以下の庭園に関わる記述は、重森三玲氏による著作『日本庭園史大系 現代の庭(二)28巻』・『現代和風庭園 庭に生きる』、中田勝康著『重森三玲 庭園の全貌』、昭和62年5月に開催された中部庭園同好会の例会で配布されたレポート「横山家庭園」（野村勘治）、「横山氏庭園（三重県菰野町）にかかる所見」（奈良文化財研究所 高橋知奈津）を参考資料とさせていただいた。適宜、重要なポイントは引用させていただく形で説明を行いたい。

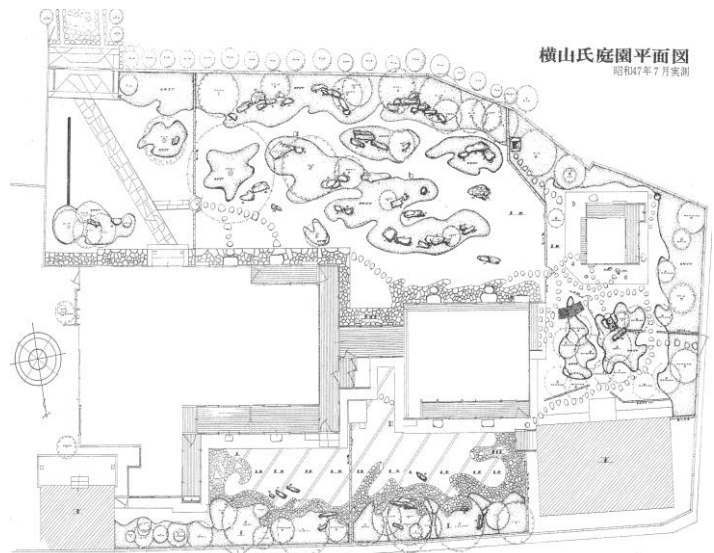


図1 横山氏庭園平面図『日本庭園史大系 現代の庭(二)28巻』より

横山氏庭園は、祖父秀吉が62歳の時に完成した庭園（昭和43年6月）である。当時、祖父は、1日に3件～4件の外科手術を行っており、大変忙しい日々を過ごしていた。この頃、父泰久は、祖父が名古屋で開業している病院を手伝うようになり、祖父は徐々に引退後の生活を考えるようになった。先祖代々大切にしてきた菰野の主屋を保存することと老後安住の地として、古い家屋と日本庭園を取り壊し、庭を作り変えて書院を新築した。加えて茶室尽日庵を名古屋から移築した。祖父は大変な勉強家で庭園に関する本をたくさん読んでいたが、なかでも当時大変著名な作庭家である重森三玲氏の著書『重森三玲作品集「庭」』を読み、氏の作品と考え方に魅せられた。誰の紹介もツテもなしに重森氏を訪ねて作庭を依頼したのである。行動力のあるいかにも祖父らしい依頼の仕方である。この祖父の熱意と押しの強さで、重森氏は直ちに作庭を了承した。昭和43年1月28日、重森氏は菰野を訪れて現地の主屋、正門などを確認した。その後、庭園の設計に取り掛かる際に、日々人の生死と向き合う祖父は「人間は、心が第一に大切だから、心字形の庭がほしい」（重森、1972）と希望を伝えた。重森氏は、この希望を了承して、枯山水の中心に心字島を設計したのである。工事は2月15日から着手し、4月14日には前庭が完成した。その翌日から尽日庵の茶庭に着手し、そして次に裏庭に着手し、工事は6月初めに完了した。その年の11月10日には、吉田堯文（紹敬の孫）宗匠のお点前により、尽日庵の席披きは行われている。

庭を鑑賞する上で必要な基本的な事項について触れたい。庭園は、玄関前庭（正門から玄関付近の庭 128.4 m²）、表庭（書院の前庭/南庭 334.2 m²）、裏庭（書院の裏庭/北庭 207.2 m²）、尽日庵露地（176.3 m²）の4庭からなる。玄関前庭から順に写真を見ながら、各庭の特徴について、重森氏の言葉や祖父のエピソードなどを交えて伝えたい。

○ 玄関前庭

重森氏は、「・・・門から玄関の間に切石に対して、これに一種の桂離宮の真の敷石的のものを作ったが、もとよりこれにも新しいデザインを施し、門と本宅との建築に調和することを念頭においた」（重森、1972）と述べている。続けて手法について重森氏は、「民家の玄関付近は、あまりにいかめしくなり過ぎてはいけないうし、それかといって弱すぎても困る。現代的な新感覚を持った上に、どこと



写真8 玄関前庭

なく気品のあるものでなければならない。その点が手法の上でむずかしい点である」と述べている。このような考えで設計を施した玄関前庭の写真を見ていただければ、「印象的でありながら品格の備わった空間」（高橋、2019）を感じてもらえるのではないかな。

○ 表庭

主屋から書院の南面に広がる蓬莱式の枯山水の庭園である。祖父の希望した「心」という字が表現されている庭である。空撮の写真からは、その心字形が読み取ることができる。表庭は、玄関前庭から見る景色、主屋からの景色、書院から眺める景色、そして茶室尽日庵から望む景色と多様な見え方がするため、筆者が一番好きな庭である。いつも、祖父は書院においてある腰掛で読書をしながら、時折庭



写真9 表庭

を眺めていた。その前の腰掛（東側）には、筆者が座り、一緒に本を読んでいた。全面を大海に見立てて白砂を敷いて、中央に心字形の苔の島、四島を配している。書院の前にある舟石にのって「心の旅」に出ると祖父から教わった。白砂で砂紋を描き、海の波を表している。幼少期は、庭師に習い、砂紋を引いていたことを覚えている。「心字形の4つの

島とその石組、そして背景の築山上の石組とが折り重なる豪華な空間」(高橋、2019)をじっくり鑑賞いただきたいものである。心を落ち着かせ、整えることができるだろう。

○ 裏庭

主屋から書院の北面に広がる庭である。父によると、過去にはここに古い家屋があり、戦時中は疎開してきた親類を泊めていたそうだ。そこを壊して作ったのが、この裏庭である。

重森氏は、「・・・横山氏には男の子息も多く、裏庭は、特に場所柄陰気な場所であつたので、思い切り明るく、かつモダンにする必要を感じた」(重森、1972)という考えのもとで設計を行った。この裏庭は「電車で郊外を走る時、多くの田畑が斜線に流れ去る風景を構成した」(重森、1972)と書いているが、筆者が子供の時に見ていた、田畑でぎっしり埋まった菰野の原風景そのものである。この庭を見た時に、今はなき昭和期における近鉄湯の山線から見た菰野の景色を思い浮かべてほしい。

○ 尽日庵露地

尽日庵は、昭和43年1月23日に名古屋市中村区の成田家(母の実家)から移築された。

移築後に、重森氏は二畳台目向切り草庵席の茶室にあうように、「この露地を草庵式の露地とする必要があつた」(重森、1972)と述べている。重森氏の尽日庵露地に関する詳細な解説は、高度な領域に属しており、筆者にそのエッセンスを伝えるのは難しいため、ここでは露地そのものの解説は割愛させていただくことをご容赦い



写真10 書院から眺める表庭



写真11 裏庭



写真12 尽日庵露地

ただきたい。代わりに、次章で尽日庵の来歴について筆者が母から聞いたこと、文化財登録に向けた調査で母の姉から聴取したことを詳しく伝えたい。

横山氏庭園についての記述を締めるにあたり、重森氏の近著『重森三玲 庭を見る心得』の次の一節を紹介する。『庭を鑑賞する時は、信用のある著書などによって予備知識をつけておくことは一応必要であるが、場合によっては、最初から無心にその庭にブツつかることが必要である。妙な予備知識などによって、正しい鑑賞が0になる場合だって多い』（重森、2020）。この言葉の妙味を感じているのは、自分だけだろうか。

第1章では、主に建築物についての仕様や構造などについて紹介してきたが、次章からは横山家の歴史や祖父母、両親からの伝承やエピソードをもとに、菰野横山邸園のヒューマンな部分に焦点をあてた記述を進めていくことにする。菰野横山邸園が多くの物語を紡いできたことをおわかりいただけるはずだ。

* 菰野横山邸園の映像資料は、「歴史のあるこの場所から心の旅に出かけよう」（三重テレビ 三重県応援団）で公開している。
<https://m.youtube.com/watch?v=PtTx8AwCrJk>

2. 横山家の歴史から見える菰野横山邸園の変遷

2017年春に菰野の蔵で発見した『横山氏小傳』、明治3年に作成された戸籍などを含む150件余りの古文書を種田祐司氏（名古屋市博物館元学芸員）に翻刻いただいた。それを編集して1冊の本『菰野横山家蔵 古文書の翻刻～永禄（重廣）から明治（久平）まで～』（2020）にまとめた。それに先立ち、曾祖父一格について『横山一格先生』（2018）、祖母について『私とおじいちゃんおばあちゃんの思い出』（2018）として本にまとめている。また、菰野町史や三重郡史、菰野町が発行する広報誌などにも横山家について書かれた文書がある。そうした資料を紐解きつつ、祖父母、両親からの伝承を交え、菰野横山邸園の歴史を振り返りたい。

○ 菰野に居住する前の横山家

横山家の歴史を表1にまとめたので、そちらをご覧ください。菰野町の郷土史家である佐々木一氏のコラム「歴史こぼなし」（2012 10月号）にも紹介されている通り、横山家は永禄7年（1564）菰野に来る前は、伊勢国司の北畠家に仕えていた。内紛が絶えなかった北畠の行く末を案じた当主である横山左馬介重近の考えで、次男重廣を北伊勢の要

表1 横山家の歴史

名前	出生地	生年月日	学歴など	薦野（菰野）との関わり * 明治より、菰野と表記
左馬介重近	一志郡下の川郷	70歳で死去（永禄年間）		北畠中納言具教の家臣（旗本）、白口の加番（天正四年の北畠氏家臣帳）。屋敷は多気北畠氏屋敷近くにあり。次男重廣を薦野に逃がす。
伊勢守重廣	一志郡下の川郷	慶長元年（1596）死去 享年73		北畠家家臣から永禄7年（1564）薦野に移り住む。永禄10年、長島の城で信長に謁見。信長の家臣となるのを固辞。員弁郡治田村の銅山を主管する。
但馬守重次	薦野	永禄8年（1565）出生 寛永12年（1635）死去		慶長5年（1600）九月、毛利秀元、吉川蔵人が南伊勢に。秀元配下に会い、郷土を守る。同12月3日、土方雄氏公から石榑村に招かれ、謁見。雄氏公が家にしばしば来られる。仕官は固辞。雄氏公の命により神職（今の廣幡神社）となる。
重勝	薦野	慶長8年（1603）出生		17歳で、雄氏公の家臣（禄100石、物頭格）となる。雄高公、雄豊公にも仕える。
因幡守重高	薦野	寛永7年（1630）出生 元禄2年（1689）死去 享年60		明暦3年（1657）焼失した江戸屋敷の再築を主管。江戸屋敷にて死去。
重武	薦野	明暦元年（1655）出生 元文3年（1738）死去 享年84		薦野藩に仕官せず。生計が苦しくなっていた。
武信	薦野	元禄8年（1695）出生 安永5年（1776）死去		資材は尽きて田園はわずかに10分の1が残るのみ。薦野藩に出仕、足輕の後出納となる。弟の重永が神職を継ぐ。
維中	薦野	延享4年（1747）出生 文政10年（1827）死去 享年81	儒学者龍崎致斎に師事	幼くして江戸に商人として奉公。その後、薦野で農耕に従事。その後、薦野藩に仕える。足輕から歩兵監察。
良助	薦野	寛延元年（1860）死去 享年74		明和3年（1766）薦野藩に出仕、下祐筆、安永4年（1778）徒目役、安政7年（1824）代官 藩政改革の提言（平治略）。郷土史に関する著作など多数。『伊勢三十三所観音霊地巡礼記』は現存。
友諒（久左衛門）	薦野	明治19年（1886）死去 享年74		重永（神職）の曾孫で、維中の娘婿（養子）として迎える。
久平	薦野	嘉永5年（1852）出生 明治43年（1910）死去 享年56		嘉永元年 大庄屋格 同6年（1853）代官（八石二人扶持）、慶応4年 御中小姓末席（一石一人扶持加増） 明治2年（1869）民政局大民政方、士族。明治3年6月司民局大属となる。同10月菰野藩大属となる。 御代官就任の誓詞、主君（13代雄志公）から薦藩置景後の領地の取り締まりを命じられた消息が現存する。
一格	菰野	明治13年（1880）出生 昭和8年（1933）死去 享年54	東京府立第四中学 二高(仙台) 京都帝国大学 (医)	明治12年（1879）三重県県会議員、菰野村会議員 明治32年（1899）菰野村村長（1期） 一格を伴い、元藩主雄志の求めに応じ、東京に住まう。菰野神社の祭主を務める。土方雄永公、雄志公からの 消息多数。弟の三四郎は、明治28年に京都で疫病（コレラか）が流行し、その対策に当たった中で多くの患者 に接し、ついに自身も感染して34歳で落命（京都大谷本廟にある三四郎を称える墓碑あり）
秀吉	鈴鹿市白子町	明治39年（1906）出生 平成16年（2004）死去 享年98	津中学 八高（愛知） 東京帝国大学 (医)	幼少期から東京へ。明治41年（1908）に名古屋船屋町に胃腸科を開院。大正10年名古屋市議会議員、 大正13年の衆院選で三重5区から出馬し、当選。二期目は愛知1区にて出馬し、当選。 昭和8年1月29日 名古屋西別院で葬儀（5000名の参列）、2月4日菰野正念寺に遺骨を安置。
泰久	名古屋 （本籍 菰野町）	昭和9年（1934）出生	菰野小学校 富田中学 明和高校 名古屋大学 (医)	弟に致、友政がいる。なお、致氏は結核で早世したが、陸軍幼年学校を主席で卒業。 一格の長女（ひさ尾）の婿養子となる。戦時中に家族で菰野に疎開。菰野で臨時診療を行う。三重県公安委員。 智福寺に黄檗宗の前管長 玉田和尚を招聘。昭和43年重森三玲氏に依頼し、枯山水の庭にする。
陽二	名古屋 （本籍 菰野町）	昭和43年（1968）出生	東海中学、高校 早稲田大学 (政治)	戦時中に名古屋から菰野に家族で疎開する。妻（三保子）の実家に尽日庵があり、秀吉が譲り受けて菰野に 移築。エントランスにしだれ桜を植える。

幼少期は、週末に祖父母と菰野で過ごす。2009アジアユース、2010世界ユースで菰野里山エクスカーション
2011年より菰野町観光ボスター総選挙（「誰が鹿や」等）に協力、2018年菰野町観光ビデオコンテスト優勝、
2019年フォレストアドベンチャー湯の山オーブン、2020年古文書の翻刻・編集など。菰野の活性化に取組む。

所であった菰野に逃がしたのである。『横山氏小傳』には、「代々一志郡下ノ川郷ニ居城シテ近郷ヲ領シ国司北畠氏ノ麾下トシテ忠勤ヲ励ム」という記述があるので、津市教育委員会に問い合わせたところ、北畠氏家臣帳ほか関連資料を送ってくれた。その家臣帳には、横山佐馬介（家臣帳には佐馬佐とある）とあり、「一志郡下之川郷 旗本 白口加バン」と役職が書かれていた。つまり、北畠家の旗本として白口峠の砦を守護していたのである。多気城絵図を見ると、北畠大納言の館近くに横山左馬介の屋敷がある。『横山氏小傳』には、重近は北畠具教公にしばしば諫言をしたとあるから、重臣であったと推測できる。以上が、菰野に至る前の横山家の歴史である。

○ 菰野横山家

菰野横山家の初代は伊勢守重廣である。重廣は、伊勢長島の城で織田信長に謁見している。ただし、信長の臣下になることを拒んでいる。この初代重廣が菰野のどこに居住していたかについては定かではない。二代目の重次は、菰野生まれである。菰野藩の初代藩主土方雄氏公から家臣になるように薦められているが、こちらも固辞している。重次は、雄氏公からは平岡神社（現在の廣幡神社）の神官になるように命令があり、この命令には従った。雄氏公は、重次を訪ねるために、しばしば菰野の家に立寄られていたという記述が『横山氏小傳』にある。重次の長男重勝は土方家の家臣となり、菰野藩士となっている。廣幡神社の家系図によれば、重勝は同時に神職にも就いている。『横山氏小傳』によれば、重勝の長男である重高は、菰野藩士にはなっていないが、廣幡神社の家系図には、重高は神職に就いているとの記述がある。重高の長男が重武であり、菰野藩に仕官したとある。重武の弟である重永が廣幡神社の家系図によれば、神職を継いでいることがわかる。つまり、重高の長男である重武が菰野藩士に返り咲き、重永が神職を継いでいることになる。ここで長男筋が菰野藩士の横山家となり、神職を継いだ重永の横山家とに分かれたわけである。『横山家小傳』を読むと、重武は、田畑を弟の重永、重正に多くを渡したという記述はあるが、どこに居住したかについての記述はない。居住地についての明確な記述はどこにも見当たらないが、正門が文化庁の調査では江戸後期とあるので、その頃には現在の横山邸園に居住をしているのではないかと考えられる。江戸時代は、農民と商人には門を構えることは許されておらず、武士は許されていたということから、あくまで推測の域は出ないが、当主が菰野藩士であった時代に建てられたのではないか。祖母（ひき尾）がかつて語っていたことをメモしていれば、この疑問に対して明確に答えられたと思うと残念である。というのも、幼少期の週末、祖父母に連れられ、名古屋からよく菰野に来て一緒に宿泊していた。また大学生の時は運転手として祖父母を連れてきていた。結婚して子供ができてからも、妻と子供を連れて菰野に来て祖父母と宿泊していた。祖母は、いつも菰野に来ると嬉しくて夜も頭がさえるらしく、居間で私たちを前にして深夜まで菰野の昔話をよく聞かせてくれた。その時の口癖の「菰野の家と庭を潰したら、化けて出てくるよ」に

については鮮明に覚えているが、残念なことに正門の時代に関わる大切な話の内容を正確に覚えていない。この菰野横山邸園で一番古い建築物は、文化庁の調査通り正門である。祖母から伝え聞いて覚えていることは、この正門はかなり古く、安政伊賀の大地震の時に倒壊せずにそのまま建っていたことである。昭和 43 年に庭を作り変える際には、正門は今の位置から 90 度時計回りに回転させた位置にあったそうだ。正門を移動する際に屋根から江戸時代の貨幣が落ちてきたという話を聞いた。かなり古い時代の貨幣だということまでは覚えているのだが、その貨幣の時代をノートに記述しなかったために、どの時代かは不明のままである。その貨幣がどこかに残っていれば、いつの時代の正門かを正確に読み解くヒントが出てくる日が来るかもしれない。なお、現在の駐車場から正門に至る通路は、昭和 43 年に畑だった土地（現在の梅林）を購入して新たに作り変えたものであり、それまでは現在の通路の真東にある軽自動車一台分が通ることができるぐらいの細い通路を通り、正門をくぐっていた。推測ではあるが、江戸時代後期の当主であった横山維中(1747～1827)は、この正門をくぐり細い通路を歩いていたのではないか。維中は、菰野藩の代官として藩の統治に関わってきたので、江戸時代後期の菰野横山邸園は、藩政の一拠点であったといえる。

正門の次に古いのが、主屋である。古い主屋が安政伊賀の大地震で倒壊して、その後に現在の主屋ができた。このことは祖母から度々聞かされていたので、棟札がなくても伝承通りで間違いなさだろう。当時の当主は、久左衛門友諒である。嘉永元年には大庄屋、嘉永 6 年には代官に任じられているので、この主屋は代官の役職の時に建てられた。つまり、この江戸末期から明治に至る時期も、藩政の一拠点の役割を担っていたといえる。また、蔵でみつかった古文書には、明治維新後の廃藩置県の際の主君からの消息など多くの手紙が残っている。その内容は、明治新政府から藩主に東京移住の命令が下ったので、菰野の統治を横山家に任せる手紙（写真 13）であったり、その労を称える類の文書であったりした。この消息の内容は、維新後から明治初期には行政の一拠点としての役割を果たしていたことを裏付ける。同時期に建てられた土蔵には、江戸期の器（写真 14）やお盆が多く保管されていたことから、庄屋として村の住民などを招いたもてなしの場であったことを偲ばせる。土蔵の 2 階には神棚があり、そこには当時のままのお札がある。2017 年に蔵を整理する機会があったが、そのお札を取り出すことはなく、見ることはできなかった。その中に当時の年代を知る手係があるかもしれない。また、1 階から 2 階へ上る階段の手すりに、江戸時代に当時の当主が乗ったであろう籠の

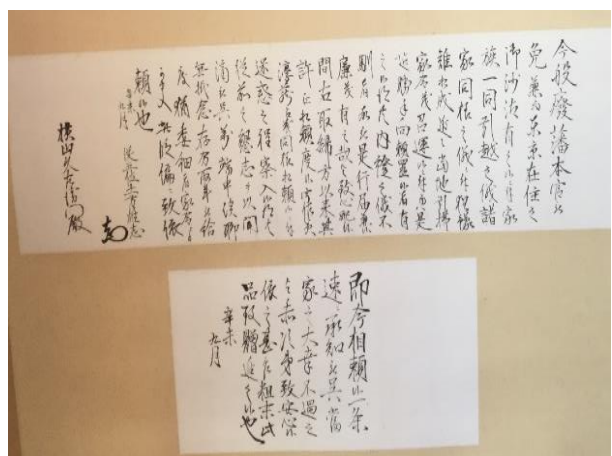


写真 13 手紙

担ぎ棒が使われていることも後世の方々へ伝えるべきこととして記しておきたい。

後に菰野村村長となる久平は、廃藩置県後東京に移り住んだ元藩主とのつなぎ役をしていたようだ。それは、土方家 13 代の雄志公から久平宛てに多くの手紙が送られた内容から読み取ることができる。久平は長男の一格を伴い、土方公からの求めに応じて東京に住んでいたことがある。祖母から、「久平はお殿様からしばしば東京に呼び出されていた」と聞いた。東京に一格としばらく住んだ後、菰野に戻り三重県議会議員、菰野村村会議員を経て明治 32 年（1899）には第 4 代の菰野村村長に就任し 1 期を務めることになる。つまり



写真 14 江戸期の器

り、明治期もまた、東京在住時期を除いて政治と行政の拠点であったということができるだろう。なお、発見された文書から久平自身、菰野藩の人事辞令をはじめ議員の辞令をすべて保存し、自身が菰野村に寄付した際の目録や菰野村からの感謝状も保管していた。当時は比較的裕福であったことを偲ばせる。しかし、昭和 59 年に郷土史家の佐々木一氏が、祖母から聞き取りした調査メモによると、久平は明治の米相場で大きな損失を出して蔵にある武具馬具などの金目の物（殿様から拝領した刀一振りと赤焼きの茶器を除いて）を 7 回も市をして現金に換えている。父曰く、一格の大学進学のための資金を残すのがやっとだったという。長い歴史の中では、栄枯盛衰が繰り返されるものである。家勢を取り戻したのが、一格である。一格は菰野で生まれたが、藩主のお供で東京住まいとなった父久平に同行して東京で育つ。当時は、国会が開設されるなど、立憲国家の中心である東京で一格は多感な時期を過ごし、仙台にある旧制第二高等学校に進学する。その後、京都帝国大学医学部に進学して医師となった。卒業後は、大阪にある湯川胃腸科の副院長となり、明治 39 年（1908）に名古屋の飴屋町に胃腸科を開院することになる。胃腸科は一格の診察を希望する患者であふれていたそう。一格は名古屋で医師を続けながら、大正 10 年に名古屋市議会議員選挙に立候補し当選を果たす。以後 2 回連続で名古屋市議会議員に当選することになる。当時すでに久平は亡くなっており、久平の妻で一格の母きぬだけが菰野に住んでいた。そんな中、名古屋で開業し名古屋市議会議員を務める一格に、郷里の菰野から衆議院議員選挙に出るように強い誘いがあった。父久平が三重県議会議員、菰野村村会議員、菰野村村長を務めていたからであろうか、一格を担ぐ勢力があった。名古屋で病院と名古屋市議会議員を続けながら、大正 13 年、三重 5 区（当時）で衆議院議員選挙に出馬して初当選を遂げている。祖母によれば、菰野の主屋は常に支持者たちであふれていたそう。また、元診療所は選挙事務所のように使われていたと聞く。このことから、一

格が菰野で衆議院議員をしていた時期は、政治の一拠点として賑やかな拠点だったといえる。なお、新聞などで明治時代にも元診療所で一格による診療が行われていたとの記事もあったが、一格はこの時期も名古屋の診療所で診療を行い、名古屋市議会にも出席していた。こうしてみると、菰野横山邸園は、人が多く集まる時期と静かな時期が時の当主の動向により決まるようだ。一格は、候補者の調整により昭和7年の衆院選には愛知一区より出馬し、当選している。地盤を名古屋に移した後も、菰野に多額の寄付を行い、菰野に一人で住まう母きぬの身を案じて海外への公務の出張を断り、菰野に住む母を見守りに来ていたことがある。祖父秀吉が他界した(2004)後に、母から1冊の古びた冊子を渡された。表紙には『横山一格先生』と書かれており、冊子の最後のページに著者と著作年について書かれていた。著者は、一格の病院に勤務する小森周太郎氏で、昭和8年1月23日に腸チフスにより亡くなった一格(享年54)の一生を昭和8年夏に綴ったものである。そこに、次のような一節がある。「・・・然れども意識最も鮮明にして身心錯乱の状更になし 望郷の念切なる乎只菰野へ行くことのみを語る・・・」。つまり、亡くなる日病に伏している中でも意識がはっきりしていて、菰野に行きたいとだけ言っていたというのだ。一格は、菰野を離れても常に菰野を想い、亡くなる時にも菰野へ行きたいという強い菰野愛に溢れていた人であった。この菰野への愛は、間違いなく祖父母から父兄弟、そして私たちへと引き継がれている。

一格亡きあと、時代は第二次世界大戦に突き進む。その時、菰野に家があったことで横山家は命をつなぐことができた。昭和6年、祖父秀吉は東京帝国大学医学部卒業後、一格の一人娘ひさ尾の婿養子となる。菰野でも祝言を挙げている。結婚後当初は、秀吉は東京帝国大学で研究を続けていたが、岳父である一格死後に一格の病院を継ぐことになる。その後、太平洋戦争が激しくなる前に、家族で菰野に疎開することになる。この疎開の経験は、祖母と父からよく聞かされてきた。「菰野があったから、食べ物にも困らず、空襲にも合わずに命を守ることができた、だから菰野を大切にするように」という内容である。父たち兄弟は、疎開した時に菰野小学校に通っているのもので菰野に友人も多く、同窓会がある度に菰野に来ているそう。軍医として外地を転々としていた祖父は、無事日本に戻ることができた。終戦後、祖父は菰野で診療を5年ほど続けていた。当時、元診療所の場所で祖父に診てもらった方に出会ったことがある。その方によれば、うろこ壁の登録文化財となった建物は、当時は洋館のような趣のあるものだったそう。

祖父母が昭和25年に家族で名古屋に戻った時には、飴屋町にあった病院と自宅は空襲で跡形もなかったのもので、一格が保有していた名古屋市鶴舞公園の近くの土地に、新しく病院と住居を建てた。以後、横山家は名古屋が本拠地となった。名古屋に戻る前に起きたことで、祖母から面白い話を聞いたことがある。祖母が菰野の主屋にある仏壇前でいつものように寝ていた時、母しげ子が白い装束を着て枕元に立っていた。「名古屋に戻っても病院は必ず成功する」とのお告げを残したそう。それで菰野を離れる決心がついたとせば

しば祖母から聞かされた。戦後名古屋に戻ってからは、菰野横山邸園は祖父母が週末に過ごすように庭を作り変え、書院を立てるなどいわば祖父母の別荘地としての役割となっていく。江戸後期から現在に至る菰野横山邸園の役割の変遷については、表2にまとめた通りである。

時代	役割
江戸後期	藩政（代官）の拠点
明治	政治・行政（村長）の拠点
大正	政治（衆議院議員）の拠点
昭和初期	疎開先・医療の拠点
昭和～平成	週末に過ごす別荘
令和	週末の生活と観光の拠点

表2 菰野横山邸園の歴史的変遷

○ 茶室尽日庵について

最後に、菰野横山邸園の文化の象徴である茶室尽日庵について触れたいと思う。尽日庵は、昭和43年に菰野横山邸園に移築されたが、元は母三保子の実家にあったものだ。母方の祖父成田幾治（注1）は、秀吉と旧制第八高等学校の同級生であった。成田は名古屋市中区大須で産婦人科を開業しており、大いに財をなしていた。幾治妻の父である石井光雄（注2）は財界人でありながら、文化人でもあった。その石井の影響もあり、成田は茶道を始めることになった。茶道を通して岳父と対話することが多かったことは、成田が生前残した著書『積翠』に詳しく書かれている。成田は、尽日庵を春日井の旧家である石黒家から昭和27年に譲り受けている。尽日庵は、名古屋の表千家吉田家の第二代宗匠である吉田紹敬の好みである。紹敬による起こし絵があることと、成田の著書『積翠』と『樹氷』にもそのように紹介されている。なぜ譲り受けることになったかは、吉田紹敬の孫である堯文が成田と八高・京都帝国大学の同級生で親しい間柄だったことによる。昭和27年2月4日には吉田堯文宗匠による席披きが行われている。その時の客人に、東海中学の親友だった黒川己喜氏（世界的建築家である黒川紀章氏父）を招いたとある。茶菓子は、両口屋とある。これは、成田が当時の両口屋大島社長と親しかったことによる。成田は、長女美智子氏（前原家に嫁ぐ）にお点前を任せて尽日庵で客人をもてなす慣わしだったと叔母本人から聞いたことがある。文化財登録に際し、叔母に聞き取りをしたところ、岐阜にある正眼寺住職梶浦逸外老師（注3）を尽日庵でもてなしたことがあるそうだ。菰野横山邸園に来る前の尽日庵は茶室として頻繁に活用されていたことがわかる。なお、『尽日庵』は漢詩「探春」（宋代の戴益）からとっている（図2）。その漢詩は、春を見つけにわらじを履いて出

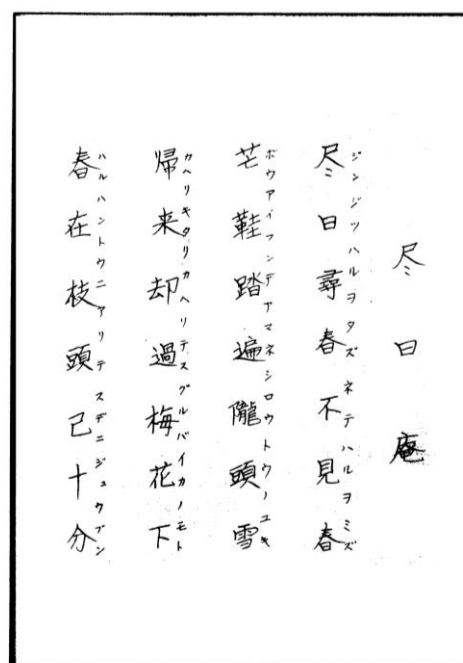


図2 尽日庵 漢詩

かけたが、春は見つからなかった。家に帰り、庭先にある梅のつぼみが膨らみ始めているのを見て、すぐそこに春が来ていることに気が付くという詩である。

菰野横山邸園の前に梅林があるのは、この尽日庵の漢詩に由来する。母が実家から女学校に通っている時には、尽日庵が勉強部屋だったそう。母が菰野に愛着をもってもらったための仕掛けを、祖父母が考えてくれたのではないかと今では考えるようになった。

（注 1）成田幾治

明治 38 年名古屋市生まれ 東海中学、八高から京都帝国大学医学部卒 医学博士
ハルピン医科大学教授 成田病院長 著書は多数あるが、尽日庵については岳父と書簡のやり取りを編集した『積翠』、ハルピン時代の生活を記した『樹氷』に記録されている。
東海学園同窓会理事長を務めた。長男収氏は、黒川紀章氏と東海高校 3 年 A 組で学業を競いあった親友。

（注 2）石井光雄

明治 14 年三重県阿下喜町生まれ 彦根中学、京都帝国大学法学部卒 日本勧業銀行総裁
日立製作所監査役 財界活動の傍ら、禅の研究などで鈴木大拙、西田幾多郎と親交を深める。石井の蔵書は、自身が眠る鎌倉の東慶寺に寄贈（松ヶ岡文庫に収蔵）。なお、那須ゴルフ倶楽部の創設から初代キャプテン、理事長を務めるなどゴルフの振興にも尽力。一格とは京都帝国大学に通う下宿が近く、面識あり。妻ふみをは、桑名藩士高松範重二女。

（注 3）梶浦逸外

臨済宗高僧 岐阜県正眼寺住職 正眼寺は、川上哲治氏が修業したことで有名。川上氏が雲隠れして正眼寺に修業した経緯については、石井が正力松太郎氏に頼まれ梶浦住職を紹介したとの証言が残る。この証言は、石井の孫である中野成章氏による。中野氏は当時サンケイスポーツの記者である。なお、同氏はサッカーワールドカップロシア大会日本代表武藤嘉紀選手の祖父として知られる。

* 菰野横山家の歴史について、2020 年 9 月 8 日に「かもしかライフカレッジ」において筆者は「横山家の江戸期から明治期の菰野藩との交流」のテーマで講演を行った。その講演を収録した DVD は菰野町図書館 2 階の郷土史コーナーで視聴することが可能である。

3. 文化財の維持管理と活用

○ 文化財の維持管理

菰野横山邸園にある建物や庭を維持していく上で、重要なのは所有者の菰野への愛着（注）であると考えている。菰野への愛着がなければ、維持するためのコストと労力を負担する意志は生まれない。そういう意味では、幼少期に祖父母に連れられ週末を一緒に過ごした経験は貴重である。筆者も息子2人をできるだけ菰野に連れてくるように心がけている。そして年中行事である12月末の神棚の札替え、新年を迎えるための飾りつけ、5月の五月人形と鯉のぼり、8月、11月、3月の法事などは欠かさず行っている。はそりを使ってかまどで炊く「かやくご飯」は、昔ながらの製法で次世代に継承すべき貴重な文化資源だ。また、所有者の菰野への愛着と同じレベルで重要なのは、菰野の家と庭を管理してくれる人たちの存在である。疎開中から昭和の時代は、南川きなさん（ねえや）が家を守ってくれた。今は、矢田信子さんが自身の家と同じように菰野の家を守ってくれている。庭の管理は、筆者が知っている限り北岡さん、小林さん、矢田悟さん（父の菰野小学校同級生）、曾根貢さんにお世話になり、現在は菰野倶楽部ジャック・ニクラウスゴルフコースの地域貢献の一環としてグリーンキーパーの村上さん、松澤さん始め社員の方々にお世話になっている。大工の梅田さん、庭師の相馬さん、電気工事は天川さんにお世話になるなど、多くの地元の方々にお世話になっている。文化財を維持管理するためには、こうした「人的ネットワーク」が必要なのである。この場を借りて、これまでお世話になった方、現在お世話になっている方々に感謝を申し上げたい。

○ 文化財の活用

文化財になる前と同様、菰野横山邸園で寝泊まりを続けることにより、息子たちの菰野愛を深めながら、文化財としての活用をどのように行うのかを伝えたい。観光客が多く来た場合の駐車場、トイレやゴミの処理などの社会インフラが未整備なので、一般開放という手法はなじまない。

コロナ禍の中、令和2年（2020）11月に重森三玲氏の孫である千青氏が明治大学の講座受講生20名余りを引率し、庭園の鑑賞と学外授業を行った。このような限定的な小規模の鑑賞会は、一つの手法であろう。この手法なら、地域住民に迷惑をかけることはない。

令和3年3月27日には、初めての試みとして菰野町観光協会主催の「菰野巡礼一心の旅」を筆者が企画した。これは、7代前の横山維中が書写した『伊勢三十三所観音霊地巡礼記』を現代版に甦らせることを目的としたツアーである。菰野横山邸園で書写した巡礼を復活させるなどの大義があり、横山家にまつわる物語性があるような企画を開発してツアーに仕立てていく予定でいる。また、菰野町の魅力は、「豊かな自然」と「自然と共生するライフスタイル」であると筆者は思う。その自然と共生した菰野町の魅力を伝えるツア

一もありえるだろう。先祖代々が保有している湯の山温泉駅近くの森にフォレストアドベンチャー湯の山を誘致した。平成 31 年（2019）にオープンして 1 年間で 1 万 6 千人を超える利用者があった。また、前任校の名古屋外国語大学のゼミ生と活性化に取り組んだ尾高高原のバーベキュー場は、大自然に囲まれながら四日市の夜景も見える絶景スポットである。そうした自然豊かな菰野町で体を整え、菰野横山邸園で「心を整えて」いただく旅も菰野町らしさを発信できるだろう。こうした菰野町の魅力を伝えるスポットと連携しながら、菰野横山邸園の文化財を活用していく予定である。

菰野の魅力を国内だけでなく世界へ伝えるための方策を考えているので、今後の展開については、地域プロデュースを研究・実践してきた筆者にお任せいただきたい。

（注）城月雅大編著『まちづくり心理学』（2018 名古屋外国語大学出版会）によれば、「地域への愛着がまちづくりに関わる基本である」との研究成果を発表している。なお、同書の書評は筆者が担当。

* 菰野町において、学生と手がけた地域プロデュース事例については拙著『元気な地域はこうして創る 地域プロデュース入門』（2015 中日新聞社）、『元電通マンの大学奮闘記』（2020 ゆいぽおと）で紹介している。2019 年度の菰野町公式ポスター『誰が鹿や』は、名古屋外国語大学の授業におけるキャチコピーをつける課題から生まれた。過去のポスターの中で、最もネットやマスコミで話題となった事例である。

まとめ

○ 文化財を巡る今日的な課題

文化財を巡る諸課題について述べたい。

まず、最近の地球環境の変化、特に地球温暖化と台風の大規模化は文化財にとっては大きな脅威となる。地球温暖化により、庭の植生が変わる可能性がある。実際、冬季に雑草拔きはしてこなかったが、最近の温暖化で冬にも雑草が伸びるようになってきた。2017 年秋の大型台風により前庭と表庭を仕切る壁が倒壊した。

次に、生物多様性の損失も大きな課題である。重森氏が着想した裏庭のデザインである、近鉄電車から見た田んぼの田園風景はすでに消え失せつつある。裏庭の説明をしても、

過去の話となってしまう。

廣幡神社の森は、重森三玲の庭にとっては、借景の一つである。それを遮るような都会型のマンションなどができたら、世界観を失ってしまうだろう。これらの諸課題は、グローバルであり、かつローカルであり、日本政府や地方自治体による今後の地球環境問題への対応のリーダーシップに期待したい。

○ 世界の KOMONO へ

菰野町は「世界の KOMONO」へと進化することは可能だろうか。筆者は可能であると考えている。

というのも、菰野町の人的資源は、豊富であるからだ。世界に店舗を持ち、植林を続けるイオン創始者岡田卓也氏、サッカー日本代表の浅野琢磨選手、花匠として世界で活躍する佐々木直喜氏、アクアグニスのパティシエ辻口博啓氏、陶芸家の内田鋼一氏、本籍が菰野町の鈴木英敬三重県知事は皆、すでに世界で活躍している。こうした人物が「ワンチーム」になれば、世界の KOMONO へ発信できる「ドリームチーム」が出来上がる。

筆者は、電通勤務時にパブリックディプロマシー(広報文化外交)に関して研究や実践をしてきた。広報文化外交とは、文化を世界に発信することで自国の魅力を伝え、世界にファンを増やす活動などを意味する。今後、菰野横山邸園から「歴史と文化」を世界に向けて発信していくことで、世界に「KOMONO」ファンを増やしていきたい。そして、世界に「KOMONO」ファンを増やして、菰野横山邸園を一拠点とした「文化観光」(注1)にも取り組んでいきたい。

菰野横山邸園から「歴史と文化」を発信・体験いただくことで、移ろいやすい魅力を菰野に引き寄せる「磁力」(注2)に昇華させて「世界の KOMONO」へと進化させていくことが先祖から課された使命であると考えている。

(注1) 令和2年4月、日本政府は地域における文化観光に関する法律である文化観光推進法を制定した。

(注2) 「移ろいやすい魅力を磁力に変える」は、造園家で東京都市大学特別教授の涌井史郎氏の持論である。

【参考文献リスト】

- ・重森三玲（1969）『現代和風庭園 庭に生きる』誠文堂新光社
- ・重森三玲・重森完途（1972）『日本庭園史大系 現代の庭（二）』社会思想社
- ・中田勝康（2018）『重森三玲 庭園の全貌』学芸出版社
- ・重森三玲（2020）『重森三玲 庭を見る心得』平凡社
- ・横山陽二（2018）『私とおじいちゃんおばあちゃんの思い出』＊非公開
- ・横山陽二編（2018）『横山一格先生』＊菰野町図書館郷土史コーナーにて閲覧可能
- ・横山陽二編、種田祐司翻刻（2020）『菰野横山家蔵 古文書の翻刻～永禄（重廣）から明治（久平）まで～』＊菰野町図書館、三重県立図書館、三重大学、名古屋大学図書館、名古屋外国語大学中央図書館、東京大学史料編纂所、早稲田大学図書館、慶應義塾大学三田メディアセンターで閲覧可能
- ・横山秀吉（1996）『卒寿一わが人生を顧みて』
- ・佐々木一（1983）「素封家横山家の歴史」菰野町
- ・佐々木一（1999）「郷土史家 横山維中」 菰野町 歴史こぼなし第 253 回
- ・佐々木一（2012）「横山家の歴史 その一～その三」広報菰野 10 月～12 月号
- ・三重県三重郡教育会（1973）『三重郡誌』名著出版
- ・菰野町史編纂委員（1974）『菰野町史』名著出版
- ・成田幾治（1957）『積翠』尽日庵
- ・成田幾治（1959）『樹氷』尽日庵

著者／横山 陽二（公式ホームページ <https://www.yokoyamateien.jp/>）

1968 年名古屋市生まれ（本籍 菰野町）1987 年東海高校卒業、早稲田大学政治経済学部政治学科入学（90～91 年米国留学）。1992 年 3 月同大学卒業。1992 年 4 月電通入社。2005 年名古屋外国大学非常勤講師（08 年より客員教授～12 年 3 月）。2009 年電通ソーシャル・プランニング局地球環境プロジェクト室部長、2010 年電通ソーシャル・ソリューション局ソーシャル・ビジネス開発部部長を歴任。2012 年 3 月同社を退社。2012 年 4 月名古屋外国語大学現代国際学部准教授に就任、2020 年 3 月名古屋外国大学退職。2020 年 4 月東海学園大学経営学部客員教授に就任し、現在に至る。

主な著書（企画・編集含む）に、『名古屋いい店うみゃー店』（2005 文藝春秋）、『広報力が地域を変える』（2005 日本地域社会研究所）、『元気な地域はこうして創る』（2015 中日新聞社）、『元電通マンの大学奮闘記』（2020 ゆいぽおと）など。共著に『松下政経塾講義ベストセレクション 地方自治編』（2010 国政情報センター）、『世界教養 72 のレシピ』（2018 名古屋外国語大学出版会）、『学びの技法』（2019 名古屋外国語大学出版会）など多数。地方自治体のまちづくり委員会委員、企業の広報・マーケティング顧問多数。



編集・発行 菰野町教育委員会 三重郡菰野町大字潤田 1250 番地
TEL(059)391-1160 ISBN978-4-944175-09-3 C1021